

(様式1)

「連合小児発達学研究所関連5大学子どものこころの研究センターによる国際拠点形成とOUエ
コシステムアジア展開」関連事業 若手人材育成部会 報告書 (令和5年度)

令和 6年 5月 10日

採択者	
ふりがな	りしゅめい
氏名	LI SHUMING
所属	金沢校 (コミュニケーション支援学領域)
職名	博士課程1年
学位取得年	2026年3月 (見込み)
連絡先E-mail	limingshujp@gmail.com
研究題目と研究実績の概要	
<p>研究題目名: <u>在日中国人児童の学校適応感に達成動機づけが与える影響</u></p> <p>実績概要: 在日中国人児童の日本語レベルは学校適応感の高さと関係することがこれまでの研究から明らかとなっており (山野上, 2016; 平野・後藤, 2018等)、在日中国人児童には日本語習得の支援が重要であると考えられている。しかし、外国人である在日中国人児童が異文化環境で直面するさまざまな心理的問題に対しても支援をおこなう必要があるだろう。児童期における学校での経験は子どもの心身に発達に大きく影響し、学校への適応のあり方が子どもの人格形成にも重要な影響を及ぼすことが指摘されている (たとえば、岡本, 1999)。そこで本研究では、自己決定理論 (Ryan & Deci, 2000) に基づいた達成動機づけという心理的要因を媒介変数として取り上げることとした。達成動機づけの異なる児童、たとえば「学校での学習が楽しく、面白い」という内発的動機づけを持っている児童と「学習なんてどうでもいい」「学習は先生に仕方なくやらされている」という外発的動機づけを持っている児童の間には、日本語レベルが同程度であったとしても、学校適応感に大きな違いが生じている可能性がある。本研究では、日本語レベルと学校適応感の関係において達成動機づけが媒介要因として影響を与えることを検証することを目的とした。研究1では、日本の小学校に在籍する中国外国人児童8名程度を対象に半構造化インタビューを行い、中国外国人児童の学校適応感に影響を与えていると思われるさまざまな社会心理的要因の抽出をおこなう。インタビュー対象者となる中国外国人児童の家庭環境や学校環境は個人によって大きく異なっていることが予想されるが、質的分析を通じて学校適応感に影響を与えている共通点と差異点を見だし、達成動機づけの違いが学校適応感に影響を与えているという仮説の生成を試みた。その後におこなう研究2では、達成動機づけは重要な他者との関係性から影響を受けるという自己決定理論の知見をふまえて、在日中国人児童、および、保護者を対象とした調査をおこない、研究1で生成した仮説の検証をおこなう。児童に対しては、母語である中国語および第二言語の日本語の言語能力の評価、達成動機づけと学校適応感に関する尺度、保護者に対しては子どもへのかかわり方に関する尺度を用いる計画である。中国人児童に対する支援のあり方を新たに提案することをめざし、アジアにおけるグローバルな社会の発展に貢献したいと考える。</p>	

現在までの進捗状況

本研究の研究協力者となる中国人児童についてデータの収集が可能なフィールドを新たに開拓する必要があると考え、日本の大都市（東京、大阪）の国際交流機関に連絡を取って訪問し、協力を依頼した。若手研究者支援の助成を受けた上で、東京の公立小学校に在籍している8名（男子4名、女子4名）を調査した。対象者の言語レベルにあわせ、母語の中国語および第二言語の日本語の両方を用いて申請者が半構造化インタビューを実施した。インタビュー項目は西部(2009)に基づいて設定して、所要時間は約45分であった。

得られたインタビューデータについて、まず、大谷(2008, 2011)のSCAT分析手続きに従い、4ステップのコーディングを実施した。そして、ステップ4において抽出された概念を包括する上位概念をグループとして設定し、セグメント化された各テキストをそれぞれ4つのグループに分類した。言葉の分からない異国の地で学校に通い、現地で生まれ育った同級生と一緒にさまざまな活動に参加し、不安を抱えていたこと、探究心が強く、授業に対するポジティブな態度を感じ、学習への動機づけが高かったこと、および、動機づけの高さによって主体的に学習や友人関係などの学校生活に取り組むことができていたことが考えられる。これらのことから、学校に興味を持ち価値を見出すことができる。また、KH Coder(樋口, 2020)を用いたテキストマイニングによる分析を行なった。対象者のインタビュー記述からの頻出語1から20位を表したものである。「授業」が最も多く出現している語であった。それ以外の頻出語は「友達」「日本語」「日本人」「先生」「クラスメイト」などであり、日本の小学校に通っている中国人児童の学習動機づけや学校適応感に影響を与えるエピソードの特徴を確認できた。頻出語1位という語とともに、「先生」「日本語」「日常」という語に強い共起関係が見られ、日本語レベルは学習意欲又は授業を積極的に聞くかということに影響を与えていることが読み取れる。また、「日本」「生活」「学校」「慣れる」などの語に共起関係を持っている「感じる」という特定の語に注目すれば、「授業」「日本語」「日常」「友達」「クラスメイト」などの語に強い共起関係が明らかとなった。「学習が面白いので、学習する」という自発的な学習以外は、良い友人関係、日本語がペラペラになったこと、いい家庭環境などのことは学習への動機づけにつながる可能性が高い。これらのことから、学校に興味を持ち価値を見出すことができ、学校適応感に良い影響を与えていると推測される。

今後の見通しについて

(1) インタビューや質問紙調査といった心理学研究の方法を多角的に用い、研究1の結果をふまえて、日本語レベルが学習動機づけを介して学校適応感に間接効果が成立するかどうかを検証する点、

(2) 教育学、言語学、心理学といった異なる研究分野でそれぞれ蓄積されてきた知見を統合し、新たな視点から問題を設定している点、

(3) 学校社会ではマイノリティとされる外国人児童へ注目し、具体的な支援方法の提案を目指している点、

といった3点が考えている。

本研究課題で得られた成果は、中国人児童への支援だけではなく、現代社会の急速なグローバル化において見過ごされがちなあらゆる外国人児童に対しても広い波及効果をもたらすと期待できる。

研究成果（論文発表、学会発表等）

2023年12月

「在日中国人児童の学校適応感に影響を与える要因の検討-SCAT分析を用いて-」
北陸心理学会第58回 口頭発表

2024年01月

「An Examination of Factors Influencing Chinese Children's Sense of School Adjustment in Japan」
連合小児発達学研究科関連5大学子どものこころの研究センターによる国際拠点形成とOUエコシステムアジア展開第5回国際シンポジウム 口頭発表

2024年09月

「在日中国人児童の学校適応感に関するテキストマイニングによる分析」
日本教育心理学会 ポスター発表（予定）